

## ISO規格の取得と活用で

# 事業経営の透明性とマネジメント力の強化を!

財団法人 大阪科学技術センター  
ATAC運営委員 藪野 嘉雄 / ATAC 久保田達之

ISO規格 (ISO9001、ISO14001) の認証取得が進んでいます。取得件数は2004年2月現在でISO9001: 34,570件、ISO14001: 14,309件ですが、この3~4年低調であったISO規格の取得がここに来て活発になってきました。

経営環境に薄日が射して、企業の生産・販売の回復が規格取得に積極的になってきています。ISO規格は大企業ではほとんど認証取得が終わり、現在、取得を目指しているのは中堅・中小企業が中心です。

特にISO9001は昨年12月に2000年版への移行が終わり、規格のタイトルが今まで(1994年版)の「品質保証の国際規格」から「品質マネジメントシステム」に改定されました。内容も大企業の製造業を対象にした文言からあらゆる業種、そして規模の大小に関係なく対応できるように改定されましたので、中堅・中小企業が取り付きやすくなりました。そのため製造業のみでなく、建設業、小売などのサービス業、病院や医院、自治体など業種横断的に広がりを見せています。

ISO14001(環境マネジメントシステム: EMS)は地球環境保全と持続可能な産業発展の調和を基本とした規格です。「持続可能な発展」を追求していくためには、最小の資源やエネルギーで最大の効果を生み出す“循環型社会”の実現が必要不可欠です。事業活動においては、原材料の仕入先から製品の流通・販売の担当者、さらには製品を使用するお客様、リサイクルを共に進める事業者とのパートナーシップのもと、より環境負荷が少なく、より効率的な活動を通して資源循環に取り組むとともに、リデ

ュース・リユース・リサイクルを配慮した開発・設計や、より高度なりサイクルシステムの構築が急務とされています。

これらの理由で、自治体・大企業を中心に購買行動の変化が進み、環境に配慮した企業の製品を優先的に購買する、いわゆるグリーン調達の一つの流れになりつつあります。

今後の事業経営活動の展開上、無視できない要因です。中小企業にとっても、社会経済の主要な担い手として、環境に対する自主的な取り組みは不可欠になりつつあります。

参考に、中小企業でいままでにISO規格を取得した動機は「企業のイメージアップ」「環境問題への貢献」「従業員の意識向上」「社会的信用の増大」「環境リスク低減」「法遵守の徹底」「コストダウン」「親企業からの要請」「取引先からの要請」「売上の増大」などです。(資料: 中小企業総合事業団)

いずれの理由にしても、認証取得したからには、それを活用し企業経営の活性化に繋ぐことが必要で、積極的な活用による効果は中小企業経営に大きく現れています。

ATACはISO9001・14001の認証取得とその活用を支援し、貴社の経営活性化に協力しています。

1. 6ヶ月で認証取得の可能な体制作りの支援をします。
2. 貴社で一番悩んでいる問題も取り上げ解決できるよう支援します。
3. これらを最小費用で実現できるよう支援します。

## 感銘を受けたナルックス(株)工場見学と社長談話

### 第4回社長懇話会記録

#### 工場見学

昨年3月に発足したATACの好評行事「社長懇話会」は予定通り順調に回を重ね、

一周年を迎える第4回は平成16年3月23日、従来と趣向を変えて午後1時30分開会とし、21名の中小企業社長および経営者にATAC関係者を加えて充実した社長懇話会になりました。



全員たかつき京都ホテルに集合し、簡単な自己紹介の後、バスでナルックス(株)山崎工場へ移動し、ビデオで企業の内容を頭に入れた後、約1時間最先端技術に触れる意義深い工場見学を体験することができました。

工場見学後ホテルにもどり、ナルックス(株)を一流企業に育て上げた若い北川清一郎社長から会社の現状や経営方針、今後の計画等について、熱意を込めて語っていただきました。(北川社長のお話(要約))

#### 1. 経営方針

私は1976年に大学の機械科を卒業して、祖父が創業したこの会社に入社し、現在3代目の社長です。経営のビジョンはナノテク加工を目指しており、いずれはボトムアップ型のナノテクを目指すのが、現在はトップダウン型のナノテクを追っかけている段階です。

当社の経営のコアになるプロセスは光とナノメートルの精度を追求することに集中しています。一方、それに必要なマネジメントのプロセスにはITを活用し、特にキャッシュフローはリアルタイムに近い状況での管理を目指しています。この二つの方針で経営し、現在60億円の売上を5年後100億円にする計画です。そのために現在モジュール生産も考えており、これは現在ATACに協力をお願いしています。

また、このような経営を進めるには特許が大切で毎年平均20件の特許を出願しています。

#### 2. 海外ビジネス

海外との取引は1996年ごろからインターネットメールでビジネスを始め、次第に拡大し、アメリカのアラバマ州に営業所を設けています。中国へは毎日のように社員が出張しています。西華大学出身のドクターが外資系の会社の技術の中核に入って当社へ打ち合わせに来るケースが増えていますが、彼らはいずれ中国系の会社を作るストーリーがあると思われるので、対応に苦慮しています。

#### 3. 人材問題

経営で一番悩んでいるのは人の問題です。採用面では、一昨年からリクナビ(リクルート ナビ)を採用しています。何回も会社説明会を行い、費用はかかるが、今までより1~2ランクもレベルの高い人が採用できるので喜んでます。その代わりに上司の指導力の問題が出てきて、管理者の大切さを身に沁みて感じています。

技術者は内部でこつこつ育ててきましたが、一昨年大手光学メーカーから折角育てた光学設計技術者を引き抜かれたことがあります。日本のトップメーカーなら、自社で育ててほしいと言いたいところです。

#### 4. 開発と資金

製品開発は産官学の連携で積極的に取り組んでいます。

地元の阪大や府大とは共同研究を行っており、光学設計ではアリゾナ大学にご指導いただいています。開発のマネジメントでは資金の循環が重要な課題です。ここ数年は自己資金で賄っていますが、節目には大きな設備投資も必要で、できるだけ自己資金で計画しますが、必要なときは主に政府系の金融機関を利用しています。科学技術振興機構の開発委託金や補助金も積極的に利用しており、開発に成功して、利益の中から返済しているテーマが2件あります。

#### 5. 我が社の経営指針

我が社は175名が社員で残りは派遣社員やパート等で補充し人件費を変動費化していますが、そのため中には顔も心も能力も分からない人が大勢います。火災や防犯の危険は社員より高いと考え、今期の経営指針として、火災の対策を徹底すると、夜間の防災訓練をやるようとしています。

我が社はこれからもさらに光学部品を極めていきたいと考えていますが、最近量子光学など新しい光学系ができてきます。それに対応する先の商品のロードマップができるような指針を今作っています。それに呼応するため、金型の精度アップとか設計のレベルアップを考えるとともに、生産環境の安定性を考えています。

現在、工場は±1.5°Cですが、さらに精度を上げないと商品の良品率が上がらないので、工程能力の向上を目指した環境作りが必要で、安全・安心・品質・納期・コストの順番で、重点指針としています。

最後にATACにはモジュール化商品について指導してもらっていることを報告しておきます。



#### (質疑応答)

北川社長の苦労話を含めた多岐に亘る体験談は参加者一同に深い感銘を与えましたが、質疑応答の時間では人材に関して、採用・給与・引き抜き・育成の問題に多くの質問が出されました。更にIT化の進め方についての質問、特許問題では褒賞制度について活発な意見交換が行われ、広範囲な経営上の問題について北川社長からありのままの経験を披露され、意義深い懇話会を終了しました。

#### (懇親会)

引き続き5時過ぎから立食パーティーに移り、北川社長も参加されて杯を片手の歓談や名刺交換などごやかな懇親の時を過ごし、好評を博した社長懇話会の行事をすべて予定通り終了して、定刻7時に解散しました。(田頭記)



## 読者の皆様との交流頁

この頁を読者の皆様とATACとの相互交流に使っています。  
今回は、「読者の掲示板」のかわりに「ATACひと言」を載せました。

ATAC  
ひと言

### 広く世界を睥睨する事が大切

学生時代に山岳部で過し、数々の山に登ってきました。北アルプスの中央あたりにある黒部の源流が湧き出す「雲の平」は、荘厳な槍や剣を一望のもとに眺められ、遥か下にはコバルトブルーの黒部の溪流が眺められる好きな場所でした。這い松やヒマラヤ杉の間に小さな湿原が紺碧の空を映して素晴らしい西洋庭園の趣も感じられます。

のんびりとした夏山でポッカーリ浮かんだ雲が、この平原を這うように上がってきて、雲のなかに包まれてしまうと、一転して寒く暗い世界に引きずりこまれます。そうすると穏やかな夏の気配は感じられず、世の中が総べて悪天候に感じてしまい、いったん雲から出て、今までののんびりした夏空を拝むと、あ

の悪天候のような薄暗い寒さと戦っていた世界はなんだったのかと苦笑してしまいます。

我々の周囲でも、同じようなことがしばしば見受けられるのではないのでしょうか。いま、我々は雲の中にいるのか、夏空から一部の雲の固まりを眺めているのか、よく判断する必要があります。ぽっかり浮かんだ雲の中で、世界中が悪天候におののいている錯覚を持たないように広く世界を睥睨する事が大切でしょう。



(梶原記)

企業

PR  
コラム

## オンリ・ワン製品を目指して

株式会社村上技研産業 代表取締役 村上 功



当社は、昭和48年4月オートメ機器開発社として創業しました。工場における自動化のためのセンサ・電子機器を特注しながら6年後、昭和54年5月に株式会社村上技研産業として設立し、当社のオリジナル製品

を中心として開発・製造・販売に力を注いでいます。

今では、3分野でオンリ・ワン製品ができ、FA分野ではAEセンサ（ガラス、プラスチック、金属等がクラック破損する時生じる高周波数音響放射を検知）の応用品。測量分野では、レーザー距離計。セキュリティ分野では、火災検知装置などです。今後は特許を重要視しながら、ATACの協力を得て更に邁進していくところです。（平成16年4月15日 文部科学大臣賞“科学技術振興功績者”受賞）



株式会社 村上技研産業

〒594-0083 大阪府和泉市池上町529  
TEL 0725-45-0321 FAX 072545-0134  
URL <http://www.murakamigiken.co.jp/>  
E-mail : [murakami@murakamigiken.co.jp](mailto:murakami@murakamigiken.co.jp)



ATACホームページもご覧下さい

ATACニュース第4号に関するご意見、および今後のご要望をどしどしATAC事務局までご連絡ください。

担当/三原・梅村

### ATAC事務局

〒550-0004 大阪市西区靱本町1-8-4  
(財)大阪科学技術センター 技術・情報振興部  
TEL06-6443-5323 FAX06-6443-5319  
e-mail : [atac@ostec.or.jp](mailto:atac@ostec.or.jp)

URL <http://www.ostec.or.jp/tec/atac/index.html>

# ATACの内容

本会は長年の経験により独自の技術とノウハウを有する技術者・管理者を結集し、お互いの知恵を出しあい、学習しあい、ネットワークを活用するとともに、中堅・中小企業が抱える国際化、技術開発、人材育成等の諸問題の解決を支援することにより中堅・中小企業の発展に資することを目的とする。

～ATAC規約第2条より～

ATACは上記の目的に則り、これまで12年にわたり中堅・中小企業の発展のために数々の活動を推進してきました。その主なものを挙げますと

## 1. コンサルティング

ATAC活動の大部分を占める業務で中堅・中小企業の抱えるさまざまなテーマについて450件以上のコンサルティング業務に携わってきました。

## 2. セミナー開催・講師派遣

ATACは従業員教育、経営管理、ISO関連、品質管理などのセミナーを企画・実施し好評を博しています。また、講演会・研修会などへの講師派遣も行っています。

## 3. 書籍刊行

中堅・中小企業の発展に役立つため、これまでに刊行した書籍は下記の通りです。

- ATACの経営便利帳
- 現場の課題解決はこうする  
(中堅・中小企業の業務改善事例)
- 中堅・中小企業へのATAC提言集
  - ① 新商品開発のヒント
  - ② ISO9000認証取得の手引き
  - ③ ISO14001認証取得の手引き
  - ④ 中小企業のためのIT
  - ⑤ 材料選択の手引き
  - ⑥ 設計を考える

## 4. NASCA(産学連携のお手伝い)

企業の技術ニーズをお預かりして、最適な技術シーズを持つ大学や研究機関などを探し、ご紹介する業務です。

## 5. 公的支援情報送信サービス

ご希望の企業に、国や府県等による研究開発補助金等の公的支援募集情報をタイムリーに分かりやすくe-mailやFAXで無料配信する業務です。

新たに公的支援情報サービスをご希望の企業の方は下記の申込書にご記入の上、FAX (06-6443-5319) でお申し込みください。

### 公的支援情報送信サービス新規申込書

企業名
所在地
担当者
TEL
FAX
E-mail
公的支援情報送信先(どちらかに✓してください)
<input type="checkbox"/> FAX / <input type="checkbox"/> E-mail

## 書評

### 生涯最高の失敗 田中耕一著 朝日新聞社刊 ¥1200

この本は1年半前に日本中をフィーバーに陥れたあの田中さんの本で、あれだけマスコミの映像と記事を通じて知られていて今更の感がありますが、初めて自分で書かれた文章や講演録、山根一真氏との対談などが収録されており、週末に格好の読みものと思います。

タイトルになっている「失敗」は言うまでもなく蛋白質のレーザーによる質量分析用試料の調整過程で余分なグリセリンを混ぜてしまったものを「もったいない」と思って分析し、高分子の蛋白質の分析に成功したことを指しています。田中さん個人の資質と実験に対する姿勢、5人の開発グループが分析装置の開発を機能毎に分担し、実験結果を毎週レポートに整理して情報を共有しながら進めた点や、蛋白質の分離に成功した時の模様、その後の特許出願、国内の学会での発表、初めての英文の論文の英国の専門誌への投稿、1号機のマニュアルづくりとアメリカでの一人だけでの据え付け、その後2号機が売れなくて別テーマに移ったことなど、この技術の一連の成り行きとそれぞれに対する田中さんの所感や反省などが述べられており、示唆に富んだものがあります。

田中さんは研究開発からその製品の営業まで、イギリスの研究所や子会社での勤務を含めて、20年間に4サイクルを経験したと書かれています。技術者のキャリアパスは本人の意思というよりはマネージメントが決めることですので、この京都の老舗企業のトップの研究開発・新製品開発のスピードに対する厳しい姿勢が判るような気がします。

この本は研究開発・新製品開発に携わる、あるいは携わった経験のある、企業の技術者にとっては共感と反省の両面で思い当たるところが多々あって興味が尽きないと思います。また、経営トップにとっても技術者の採用から訓練・キャリアー形成や研究開発・新製品開発のマネジメントを考える上で得るところがあると考え、紹介します。(池田記)

